

図書館司書による学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成

—鹿児島県立図書館講座「学習発表サークル」の事例をもとに—

久保田 治 助*・池 田 俊 彦**

(2018年10月23日 受理)

Organization Formation of Learner's Subjective "Investigative Learning" activity
by Librarians: A Case of a "Learning Presentation Circle" Course Organized by the
Kagoshima Prefectural Library

KUBOTA Harusuke, IKEDA Toshihiko

要約

本研究は、図書館司書による学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成について明らかにしようとするため、鹿児島県立図書館における講座「学習発表サークル」を事例として分析を行うものである。

図書館で調べ学習を行う学習者たちは、その学習内容を発表したいという欲求を持っているのではない。しかし、一般の学習者にはそのような機会は与えられていない。そこで、図書館が発表の機会を用意したならば、彼らは学習することに目的を持ち、主体的な「調べ学習」活動の組織形成へと向かう方略になるのではないかと考えた。同時にこの組織形成を推進するために図書館司書がどのような支援を行うことができるかも検証することとして、「学習発表サークル」を実施した。

発表会は6人の発表者により6回にわたって実施された。本稿は、6回の発表内容と図書館司書の支援内容、聴講者の感想を示し、学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成の可能性、図書館司書の支援の在り方について論考するものである。

キーワード：公立図書館、図書館司書、調べ学習、図書館教育

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

** 出水市立西出水小学校 教諭

1. はじめに

本研究の目的は、図書館司書による学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成について明らかにしようとするものである。そのために、鹿児島県立図書館における講座「学習発表サークル」を事例として分析を行う。

近年、都道府県立図書館には、利用者及び住民の自主的・自発的な学習活動を支援するため、講座、相談会等を主催し、多様な学習機会の提供に努めること、また、利用者及び住民の要望を踏まえた新たなサービス等に努めることが求められている¹。しかし、公立図書館の現状として行われている学習活動への支援は、近年では施設サービスに関して指定管理が進み、学習者からの相談に応じるレファレンスが主であり、図書館から積極的に働きかける実践が難しくなっている。

しかし、これまでの先行研究では、公立図書館における「調べ学習」活動は、学校図書館の拡張としての児童生徒に対する図書館教育に関する研究が中心であった。たとえば、堀川照代・塩谷京子(2016)や齋藤泰則(2016)など『学習指導と学校図書館』に関連する記述においては、学校教育における教科と図書館をつなぐ学びとしての「調べ学習」活動について示されている²。しかし、成人の生涯学習として「調べ学習」活動と、その成果を発表するという、〈市民のための図書館活動〉としての研究は未だ深まっているとは言えない。

そこで本研究では、図書館で調べ学習を行う利用者を、その目的により二群に分けて捉えた。一群は生活や仕事等に関する必要課題を目的として調べ学習を行う利用者群である。この利用者たちの調べ学習は目的性であるため、課題解決によって調査研究の目的が達成される可能性の高い性質のものである。図書館側のサービスは問い合わせに応じるレファレンス対応ということになる。第二群は、趣味やライフワーク等に関する要求課題としての調べ学習を行う利用者群である。この利用者たちにとっては、調べる行為自体が目的でもあるため、一つの課題に対する答えが得られたとしても、調べ学習は継続することが多いであろう。では、第二群の学習者は学習の目的を必要としないのか。学習者にとって調査研究そのものが喜びであるとしても、蓄積された知識をアウトプットする欲求であると考ええる。

調べ学習で知識を蓄積した学習者に、学習内容を他者に伝える機会があるならば、それは学習の目的意識となり、主体的な調べ学習組織形成の方略となり得ると考えられる。学んだ知識を活用する場があることは学習者の学ぶ欲求を大きくするであろうことは、公民館講座において学び手であった学習者が、別の機会では進んで指導者になろうとすることがしばしばあることから肯定できる。そこで、鹿児島県立図書館において、「学習発表サークル」を実施し、図書館を活用して調べ学習をする利用者を対象に発表の機会を提供するという試みを行った。

本稿では、まず、「学習発表サークル」をどのように企画したか、どのような発表が行われたか、図書館司書としてどのような支援を行ったかといった詳細を示す。その後、この事例をとおして、学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成の可能性、図書館司書の支援の在り方について論考する。

2. 「学習発表サークル」立ち上げの経緯と手順

(1) 経緯

県立図書館司書が調査相談業務を行う過程で、利用者の30代男性O.N³が、調べ学習を続けているビザンツ帝国について、他人に紹介したいという思いを強く持っていることを知った⁴。他の図書館司書にも同様の経験があることから、図書館利用者には、自ら興味を持って調べた学習内容をアウトプットしたいという潜在的な思いを持っている者が少なからずいるという感触を得た⁵。

しかし、一方では彼らの欲求を満たすような、発表や紹介の機会は図書館ではほぼ与えられていないという現状も確認し、これが「学習発表サークル」の着想となった⁶。

(2) 手順

① 館内司書への説明

「学習発表サークル」の必要性と構想を、関係司書に説明し研究的実践への協力要請を行った。年度途中からの新規事業は行わないのが慣例であるため、いわゆる根回しとして必要な作業と考えた。

司書からは概ね賛同を得られたが、発表者が集まるかについては懐疑的な見方が少なくなかった。この時点では、図書館司書は前項のO.Nとの語り込みにおいて、必ず応募する確証を得ていたので、最低でも一人の発表は可能と考えていた。

また、クレーマーや質の低い利用者⁷が応募した場合の対応を不安視する声もあったが、そのような利用者への支援方法を探ることも、本研究の狙いであることを説明した。

② 館長ヒアリング

企画書を作成しヒアリングを行った。館長は発表への応募があるか疑問を呈したが、企画そのものには図書館サービスの多様性を探るものとして受け止めた。

③ 参加者募集の広報

5月21日から募集開始。図書館内でのポスター掲示とチラシ配布、HPへの掲載。定員30人まで随時受付。

④ 打合せ会

平成23年6月30日。当初の応募者4人出席。発表期日等の決定。

⑤ 随時受付

平成23年8月と12月に2人の参加者追加。

3. 「学習発表サークル」の概要

(1) 実施期間 平成23年度

(2) 発表者

県立図書館を利用して、主体的に調べ学習をしている者。または、発表を目的に県立図書

館で調べ学習をする者。

(3) 発表内容

県立図書館の資料を活用して学習したもの。ジャンル不問。

(4) 発表会の流れ

①発表者の紹介 (5分) ②発表 (30分) ③質疑応答 (20分) ④事務連絡 (5分)

(5) ルール、条件

毎回1名が発表する。他者の発表を肯定的に聞き批判をしない。聴講のみも可。

発表者は、本研究の趣旨から県立図書館利用者に限定し、県立図書館の資料で調べ学習をすることを条件とした。ただし、発表を決めてから調べ学習を始めることも可とした。

また、発表の際は、調べ学習で利用した県立図書館の資料を展示し、発表内容の参考図書として紹介することを条件とした。

更に、発表者は、必ず他の発表者の聴講をすることを条件とした。

4. 発表者と発表内容、図書館司書の支援、聴講者の感想

(1) 第1回 8月23日(日) 午前11時から12時

① 発表者 O.N 30代男性 県立図書館利用 約20回/1年

調べ学習のため、頻繁に調査相談を行っており、本サークルに最初に参加申込みをした。打合せ会において、第1回発表者に立候補した。

当初、執筆中のライトノベルを紹介したいとのことであったが、司書の提案を受け入れ、ビザンツ帝国について発表することになり、再度調べ学習を行い発表に至った。

② 発表内容 「ビザンツへの誘い」

発表者は、かねてから旧ローマ帝国が東ローマ帝国と西ローマ帝国に分裂した当時のヨーロッパについて詳しく調べていた。争いと分裂を繰り返した世界史の中で最もドラマチックな地域と時代であると考え、強い憧れを持っていた。東ローマ帝国がビザンツ帝国と呼ばれる理由、政治、宗教、戦争等について熱く語った。調べ学習を基に、十字軍の戦いを舞台とするライトノベルを執筆中であることも紹介した。

地図がないと伝わりにくいという図書館司書の助言を受けて、黒板にヨーロッパの地図を手書きし発表に臨んだ。また、緊張のためか、早口になって聞き取りにくい場面が見られた。

発表時間30分。配付資料A4判4枚。

③ 図書館司書の支援

事前打合せを5回行った。1回目の打合せでは、執筆中のライトノベルを発表するため資料を作成していた。図書館司書は調べ学習の発表にならないことを説明し、これまで調べ学習を重ねてきたビザンツ帝国に関する発表にするよう助言した。関連図書の書棚で一緒に図書資料を手に取りながら、発表内容を検討し修正を行った。

その後3回の調整を行い、前日のシミュレーションでも細かな助言を行った。

④ 聴講者の感想（当日のアンケート記入）

- 大学で学んだことをより詳しく学ぶことができた。
- 非常によく調べていて感心した。ビザンツ帝国に興味が出てきた。
- 内容が分かりやすくまとめてあった。興味深く拝聴した。
- 幅広く、深く学び、準備されたことが伝わった。すばらしい発表だった。
- レジメや黒板を使い、適宜質問を受けるなど工夫されていた。
- 発表者個人の思い入れを味わいながら聴講するという珍しい体験だった。
- 高校生の時よりずっと興味深く聞くことができ、世界史の楽しさを見直すきっかけとなった。自分も勉強したくなった。
- 自分は予備校で世界史を教えたことがあるが、今回聞いていて、自分の言葉で語っているなあと感じた。
- 学習したことを発表することで、自分の本当の力になっているんだなあ、この機会の価値の大きさを感じた。
- 興味あることを深く調べていくことのすばらしさを感じた。
- 学んだことを発表する姿勢がすばらしい。自分もテーマを決めて取り組みたい。
- 研究の目的が明確でなかった。また、成果と今後の取組を聞きたかった。できあがった小説を読んでみたい。

(2) 第2回 9月17日（土）午前11時から12時

① 発表者 LH 50代男性 県立図書館利用 約12回／1年

薩摩川内市在住、図書館HPの学習発表サークルの募集を見て来館。図書館司書にサークルの概要について質問後、参加申込みを行った。当初、フィールドワークで調べている苗字の由来を発表したいという考えであったが、図書館での調べ学習がないことから、パソコンソフトについての発表をすることとなった。

当初、ぶっきらぼうで取っつきにくい印象であったが、語り込むうちにリラックスし、打ち解けていった。

② 発表内容 「オープンソースとは？」

発表者はパソコンに詳しく、市販ソフトは使用せず、オープンソースを活用している。パソコンユーザーの多くは、なぜ高価なソフトを購入し使用しているのか。なぜ無料で使用できるオープンソースを使わないのかという問いかけから発表が始まった。そして、文書作成や表計算等、代表的なオープンソースについて紹介し、その活用法について発表した。

聴講者はパソコンに詳しくない者が多く、専門用語が分からないため、理解しづらい発表となった。発表後の聴講者からの質疑も少なかった。

前日にはシミュレーションを行い、プロジェクターを活用して発表したが、人前で発表することの難しさを実感し、分かりづらい発表であったことを反省しながらも、発表できたことには満足した。

発表時間 35 分。配付資料 A4 判 1 枚。

③ 図書館司書の支援

事前打合せを 3 回行った。図書館資料の活用が明確でなかったため、図書資料の検索方法を説明し、参考文献を紹介しながら発表できるよう助言した。

図書館司書がオープンソースに詳しくなかったため、内容面への適切な助言ができなかった。

④ 聴講者の感想（当日のアンケート記入）

- 普段、パソコンはよく使っているがオープンソースについては知らなかったのでもいい機会だった。
- 今後のパソコン活用において、有益な知識を得ることができた。
- Linux の話は聞いていたので興味深かった。細かいパソコン用語が分からなかった。
- オープンソースそのものの存在を知り驚いた。その利点を知り、使ってみたいという気持ちになったが、とっかかりを実演してほしかった。
- インストールの仕方など実演しながらの説明を聞いたかった。
- せっかくスクリーンを使うので、視覚に訴えて説明していただければもっと理解が深まったのではないかな。
- 文章や言葉による説明だけでなく、内容を図式化するなどするともう少し理解が深まるのではないかな。
- オープンソースが鹿児島で広がっていくことを期待します。
- 専門的な内容であったが、概要は分かった。自分の興味関心が広がり、自分もこのことについて勉強したくなった。
- 家にある大量の紙媒体を電子化できたらいいなと感じた。
- 専門性の高い話でしたが、具体例を挙げつつ、オープンソースの機能やよさを語っていただき分かりやすかった。
- 忙しい仕事の合間にこれだけの勉強をされていることに驚いた。
- 研究発表ということであれば、明確な「テーマ」を設定し、具体的な研究構造で発表してほしい。

(3) 第 3 回 本人都合により中止（10 月実施予定）

① 発表者 H.J. 30 代男性 県立図書館利用 約 6 回／1 年

第 1 回発表者と個人的な交流があり、その発表を聴講したことがきっかけで自らも発表したいと 8 月に随時申込みをした。元々、精神的な障害（適応障害）があり、作業所

で働いていた。発表へ向けた資料作成のため関連図書の貸出を行い、調べ学習を進めたが、発表の1週間前にキャンセルの電話連絡があった。その後、来館することはなかった。

② 発表内容 「変化球の科学」

本人は野球の経験者で、その体験を生かしながら、投手の変化球について、回転系（カーブやシュート等）、無回転系（フォークやナックル等）に類型化して、科学的な分析を紹介しようとする内容であった。配付予定の資料は全て手書きで、ボールのイラストが随所に描かれた分かりやすい資料であった。

配付予定資料 A4 判 5 枚。

③ 図書館司書の支援

事前打合せを2回行い、配付資料（A4判5枚）まで準備した。よく整理され興味深い内容であった。写真による図解資料を参考図書として提供し、実際にボールを使って実演しながら発表することを提案したところ、喜んで受け入れた。

打合せの過程では、楽しげで、発表への自信を深めている様子が見られていたので、中止に至ったことで残念な思いが残った。

(4) 第4回 11月19日（土） 11時から12時

① 発表者 S.H 40代男性 県立図書館利用 約6回／1年

自宅で父親と不動産業を営んでいる。高校から大学時代にかけて、図書館を頻繁に利用し、受験勉強や趣味の調べ学習を行っていた。

近年は来館が減っていたが、「学習発表サークル」のポスターを見て、自らの少年期であり、こよなく愛する1980 - 1990年代の日本文化について調べ直し、発表へとつな
げた。

シミュレーションは実施せず、本人が好きなことをやや小聲で淡々と語るといった状況であった。

② 発表内容 「80年代的事象を再考する」

内容は当時のテレビの情報が中心であり、特に当時、発表者が欠かさず視聴していたという深夜番組「カノッサの屈辱」を繰り返し引き合いにして、当時の世相を語った内容の発表であった。具体的には、イエスの方舟事件、ゆとり教育、1億円拾得事件、日航機墜落、校内暴力、ルービックキューブ、ファミコン等、時に細部にわたる内容であった。

発表時間 35分。配付資料 A4判4枚。

③ 図書館司書の支援

事前打合せを行うよう声を掛けたが来館することはなく、当日に本人と打合を行い発表したため、担当司書としては不安を抱えたままの発表であった。そのような支援の雌雄としては、細かな指示を受けることなく、主体的に発表したいという発表者の意図を

汲み、必要以上に助言せず、気持ちよく発表へ導く支援を行った。

④ 聴講者の感想（当日のアンケート記入）

- 「カノッサの屈辱」というTV番組を思い出した。とてもおもしろい番組だった。
- 80年代、自分の青春時代を懐かしく思い出すことができた。
- 聴講者同士の意見交換や交流もできて、回を重ねて充実してきていると感じた。
- 1980年代という時代を切り取って話を聞くことがおもしろかった。このような時代の振り返り方に興味を持った。
- 興味深く聞くことができた。現代がどうなっていくのかということにも興味がある。
- 消費社会をサブカルチャーと結びつけてみるという視点に目新しさを感じた。
- この会には、タイトルに惹かれてきた。「階層」→「平面」と言う始点に共感した。
- 難解です。しかし勉強になった。
- 80年代を懐かしく拝聴した。80年代から私たちが学ぶべきものや2010年代が後世どう語られるのかなども考えてみたい。

(5) 第5回 12月11日（日） 11時から12時

① 発表者 M.K 20代女性 県立図書館利用 約30回／1年

中等教育の家庭科の教員採用を目指して勉強中であった。図書館は受験勉強の場として活用していた。

調べていることを発表したいというよりも、人前で堂々と話す経験を積みたいというのが、参加の動機であった。発表が決まってから、図書館資料で調べ直しデータの正確さと新しさを確認した。

② 発表内容 「食育は身体と心の思いやり」

食と健康の関係について、絵図を使った資料を提示し、食育の重要性を語る分かりやすい発表であり、聴講者との質疑応答も活発に行われた。

具体的には、日本人の食生活は、高塩分・高炭水化物・低動物性たんぱく質という旧来の食事パターンから、動物性たんぱく質や脂質の増加等、大きな変化を遂げた。このことにより、感染症や脳出血などの減少が進んだ、一方では、がん、心疾患、脳卒中、糖尿病等の生活習慣病の増加が深刻な問題となっている。栄養・食生活は、生命を維持し、子どもたちが健やかに成長し、また人々が健康で幸福な生活を送るために欠くことのできない営みである。また、食生活は社会的、文化的な営みでもあり、QOL（人々の生活の質）との関わりも深い。まとめとして、「1日最低1食きちんとした食事を、2人以上で楽しく、30分以上かけてとる」ことが大切であるといった内容であった。

発表時間 40分。配付資料 A4判 4枚。

③ 図書館司書の支援

事前の打合せ3回。最初の打合せの段階でよくまとまっていた。発表内容が多く、30

分の発表時間で消化しきれないことが考えられたため、大幅に削除をするよう助言した。絵図やグラフ等を多く使用した図書資料を提供したところ、配付資料に工夫が見られた。

人前で話すことに、自信がないとのことであったので、シミュレーションをしながら、効果的な話し方についての助言を行った。

④ 聴講者の感想（当日のアンケート記入）

- 「“食”は生活する上での基本である」を再認識した。
- 仕事（学校栄養士）がら、テーマが気になり参加した。今後、保護者に話をする時に参考にしたい。
- 「食育は体と心の思いやり」という言葉に納得した。家族のために作っている食事は大半が身体のことを思っていることでしたが、心への思いやりもあると知り感動した。
- 食育は子どもだけでなく、大人も主体的に取り組まなければならない大切なことだと改めて感じた。
- 話に出てきた理念がT P Pで崩壊する恐れがあるのではないかと思う。そのようなことに踏み込んだ話の展開も聞きたい。
- 弁当の日の取組は、以前曾於市で聞いたことがあったが、子どもへの配慮、保護者や司書の理解など難しいと考えたことを思い出した。
- 「食育は人間力を育てる」ことを様々な文献や自身の取組を交え、分かりやすく伝えてくださった。多くの子どもたちや家庭にこの取組を伝えたい。
- 食育について真剣に考えて取り組まれていることに感動した。発表者の考えるおすすめ献立や夕食シーンなどが絵や紙芝居の形で発表できるといいのでは。
- 食の現場の視点で語る話や、食という視点で地域を考えることもなど新鮮だった。
- 食と農、食と医療についても深めてほしいと思う。
- 現在子育て中のため、大変ためになる話であった。静かな語り口ながら説得力のある話し方であった。
- 県立図書館がこのような取組をしていることを初めて知った。もっとP Rしてほしい。

(6) 第6回 H24年2月26日（日）10時30分から11時30分

① 発表者 K.E 30代女性 県立図書館利用 約15回／1年

鹿児島県の観光開発に取り組むNPO法人に参加しており、学習発表サークルの発表会を聴講し、自らも12月に随時申込みをし、発表することとなった。

調べ学習の発表というよりも、日頃の活動から得た知識や考えを提言したいことを発表したいという欲求が強かった。根拠となる資料や関連図書を検索し、発表の際に紹介した。

② 発表内容 「鹿児島県の国際観光と地域活性」

本県が観光県として価値の高い素材を有していることを、歴史、自然、気候等の視点

から紹介した。観光地として定着している鹿児島市、指宿市、霧島市以外にも県外、海外の人にとっては魅力的なポテンシャルの高い地域が多いことも指摘した。また、地理的環境から海外から人を呼び込むのに適していること、海外へ向けたアピールの重要性、それと関係づけた地域活性の推奨など、プレゼンテーションソフトを駆使した提言性の高い発表となった。

整理された分かりやすい発表であったため、聴講者の関心も高く、質疑応答が活発に行われた。

発表時間 35 分。配付資料 A4 判 4 枚。

③ 図書館司書の支援

事前打合せ 2 回。打合せの段階で、配布資料や発表原稿が準備されており、大きな修正は必要なかった。

しかし、自らの活動を通じて蓄積された内容が主であり、本サークルのルールとしてある図書館資料を使った調べ学習をした部分が不明確であった。改めて図書館の関係図書を検索して調べ学習を行い、発表を裏付ける資料として紹介できるように助言した。

④ 聴講者の感想（当日のアンケート記入）

- 観光産業は総合産業といわれ、あらゆる産業と結びついています。観光が地域再生、地域興しにつながればと思います。ありがとうございました。
- 発表者は当初、不安を感じていたが、事前に何度も打合せを行い、当日は内容、方法共に良くできたと思う。
- 堂々とした発表でした。余裕さえ感じました。もう少しゆっくり話した方がよく伝わったと思います。
- 本を提示することで、本館で学ばれたことが明確になり、このサークルの意義を感じた。興味をそそる題材だったので、「やねだん」の豊重さんや「ねぎぼうず」の永山さんの活動も紹介資料に入れたと思った。観光と地域興しが関連づけられるとおもしろいなという思いが広がるきっかけになった。今後、テーマによっては発表者が更にこれからの学習意欲をそそられそうだと感じた。
- 分かりやすかった。自分なりの課題が生じ、解決への意欲が高まった。
- 鹿児島に住んでいて良かったと思えるいい発表だった。
- 関連文献からの発表だけでなく、もう少し地域の具体的な話を聞きたかった。
- 質疑応答でたくさんの方の意見が聞けて、勉強になりました。
- よく調べられています。図書館での調査も自分の足で調べることになると思います。
- 県の観光について、様々な視点から知ることができてよい勉強になりました。参加者からの質問や意見も多く充実した会でした。
- 鹿児島を観光都市として発展させるというのは大切な視点だと思う。そういう意味で興味深く聞かせていただいた。

- 初めて参加したが、大変意義のある会だと感じた。

5. 発表者の学びと図書館司書による学習者への支援の意味、聴講者にとっての意義

(1) 発表者の学び

「執筆中のライトノベルを紹介したい」「フィールドワークで調べている苗字の由来を発表したい」「日頃の活動で得た知識や考えを提言したい」といった発表者の意向にみられるように、県立図書館の資料を活用した調べ学習を発表するという条件に対する意識が低かった。図書館司書の支援を受けながら、図書館資料で裏付け調査や追加調査を行い発表したが、発表者は図書資料を提供する教育機関における発表会の意義を認識することとなった。

また、「再度調べ学習を行い」「発表へ向けた資料作成のため、関連図書の貸出を行い調べ学習を進めた」「日本文化について調べ直し、発表へとつなげた」「図書館資料で調べ直しデータの正確さと新しさを確認」「根拠となる資料や関連図書を検索し、発表の際に紹介」とあるように、発表者は、発表へ向けて調べ直しを行っている。発表という目的があることで、参考資料に新鮮さ、正確さ、詳細さ等を求め、調べ学習そのものが充実するという結果になった。

公共空間での発表経験の少ない発表者たちであるが、「黒板にヨーロッパの地図を手書き」「プロジェクターを活用」「実演しながら」「絵図を使った資料を提示」「プレゼンテーションソフトを駆使」するなど、プレゼンテーション力を高める機会にもなった。

(2) 図書館司書の支援の意味

「関連図書の書棚と一緒に図書資料を手に取りながら」「図書資料の検索方法を説明」「写真による図解資料を参考図書として提供」「絵図やグラフ等を多く使用した図書資料を提供」「発表を裏付ける資料として紹介できるように助言」とあるように、図書資料の活用が図られるよう支援した。これは、発表者の多くが、図書資料の裏付けに乏しかったためであるが、このことで発表内容の信頼性が高められるとともに、発表者たちが調べ学習の重要性を再認識することとなった。

さらに、4人の発表者は前日にシミュレーションを行った。いずれも発表者の希望で行ったものであるが、具体的には時間内に終わること、ゆっくりと話すこと、配付資料や掲示資料を効果的に活用することを助言した。これは、発表経験の少ない発表者たちの不安を取り除くことに効果があった。

第2回の発表内容については、司書が詳しくないため、適切な支援ができなかったが、このような企画では想定されることであり、複数の司書の専門性を生かすなど対応の在り方は課題となった。

(3) 聴講者にとっての意義

「珍しい体験」「興味深く聞かせていただいた」といった感想があることから、興味を持って

聴講していたことが分かる。また、「自分も勉強したくなった」「自分もテーマを決めて取り組みたい」という感想も多く、聴講者の学習意欲を刺激したと推測できる。更に、「発表会の価値の大きさ」「回を重ねて発表が充実してきた」「県立図書館がこのような取組をしていることをもっとPRしてほしい」といった発表会自体の意義についての感想もあり、一般の図書館利用者に発表の場を提供することは好意的に受け止められたと言える。最終回の聴講者の感想に「本を提示することで、本館で学ばれたことが明確になり、このサークルの意義を感じた」とあったことから、サークルの意図が聴講者に広く伝わったと言える。

6. 発表者の学習の振り返り

平成24年2月26日(日)の最後の発表会終了後、5人の発表者にインタビューを行った。

第1回発表者 O.N

大好きなビザンツ帝国について発表ができたことに満足している。多くの人が聴いてくれたことがうれしかった。次回は、執筆中の小説を紹介しながら、時代考証を行うという発表をしたい。発表者同士の交流会を行ってほしい。

第2回発表者 I.H

難しい内容でよく伝わらなかったと反省しているが、図書館がこのような企画をすることはとても意義があると思う。自分の苗字のルーツについて、フィールドワークで調査しているので、図書館資料で裏付けの調査をして次回発表したい。

第3回発表者 H.J

発表キャンセル。インタビューなし。

第4回発表者 S.H

自分の少年期から青年期にかけての日本は活気に満ちていた。その時代を愛する思いを聞いてもらえてうれしかった。他の発表者もよく勉強していた。時間が限られていたので、チャンスがあればもっと詳しい発表をしたい。

第5回発表者 M.K

発表するためかなり勉強した。家庭科の教員になるため勉強中である。採用試験の面接や教壇に立った時のため、今回の発表は役に立った。図書館の司書が丁寧に指導してくださり助かった。来年もぜひ参加したい。

第6回発表者 K.E

とても良い企画だと思う。日頃の活動で感じていたことを伝えられてうれしい。こんな機会があることはすばらしい。どの発表もとてもおもしろかった。もっと多くの人に聞いてほしい。次回は、夫も発表したいと言っている。

5人の発表者が、次の発表への希望を持っていることから、学習者にとってアウトプットの欲求は確かにあること、学習の成果を発表する場は学習活動への大きな意欲になるということ

を確認することができた。さらに、他者の発表にも興味を持ったという感想や発表者同士の交流会を希望する意見等があり、今回の試みが、学習者による主体的な「調べ学習」活動の組織形成につながったと言える。

7. まとめ

以上の実践から以下の2つの視点について明らかとなった。(1)学習者の主体的な「調べ学習」活動の組織形成の可能性、(2)図書館司書の支援、である。

1つ目としては、本事例が、初めての企画であったにもかかわらず、6人の応募があり5人が発表したこと、全ての発表者がもう一度発表したいという希望であった⁸こと、聴講者が毎回30人程度いたことから、図書館で調べ学習を行う学習者には、潜在的に発表への意欲を持つものが少なからずあると考えられる。さらに、発表者が主体的に発表日を決めることにより、計画的に調べ学習に取り組むことができた。「従来よりも調べ学習に集中して取り組んだ」り、「改めて調べ学習を始めた」りした」と回答していることから⁹、発表の場があることが調べ学習への意欲を向上させる効果があるといえる。

2つ目としては、上記に示したとおり、発表者に対して事前指導をどのように行うかが課題である。発表内容の精選、プレゼンテーションの工夫、配付資料の作成、発表原稿の作成、不安の解消等、学習者支援に関する課題は多様である。学習者は、公共空間での発表の経験が少ないため、司書の支援の必要が多い。さらに、発表内容が学習者の主体性に伴って、内容も高度に、多岐に渡るため、司書の支援の高度化に迫られる。複数の司書の専門性を生かした、チームを組織した支援が必要であるといえる。

注

¹ 文部科学省告示「図書館の設置及び運営上の望ましい基準」平成24年12月19日 pp.6-8。

² 堀川照代・塩谷京子『学習指導と学校図書館』改訂新版、放送大学教育振興会、2016年。齋藤泰則編集『学習指導と学校図書館』樹村房、2016年。など参照。

³ 図書館司書への調査相談を頻繁に行っていた。第1回発表会の発表者となる。

⁴ 図書館を頻繁に利用するO.Nの調査相談に対応しているうちに、O.Nがビザンツ帝国の魅力について語り始めたことが端緒である。

⁵ 調査相談業務を行う司書への聞き取り。研究内容を司書に話したがる利用者を対応したことがあるという経験が8人の司書のうち8人にあった。

⁶ 類似の事例は少ないが、八王子市中央図書館において60歳以上対象の「千人塾」がある。また、公益財団法人図書館振興財団は毎年「図書館を使った調べる学習コンクール」を開催しており、大人の部もある。

⁷ 他の利用者への迷惑行為、図書館司書へ無理難題を言ってくる利用者。

⁸ 発表者へのインタビュー、平成24年2月26日、鹿児島県立図書館研究室。

⁹ 事前指導による聞き取り。第1回、第2回、第3回、第4回の発表者は、以前の調べ学習を基に発表へ向けて補完する程度の調べ学習を行った。第5回、第6回の発表者は、以前の資料が少なく発表が決まってから調べ学習を始めた。